

会話におけるリズムの役割

「割り込み」と「沈黙」は“権力を発動する装置”か

内田 伸子

コミュニケーションにおけるリズムは、第二言語習得だけではなく、異文化適応においても鍵を握る。以下に掲げる「私はバイリンガルになれなかった」(渡独年齢：3歳11カ月・帰国年齢15歳7カ月)というレポートの文章はそのことを如実に物語っている。

「(前略) それぞれの年齢でどのような文化に出会うかが言語の最終的習熟度になんらかの影響を与えるのではないでしょう。／幼児期には童謡や“かごめかごめ”のような遊びでことばのメロディを体得し、小学校に上がっての詩の暗唱を通じてことばのリズムを身体に刻みます。／オイレンシュピーゲルやミュンヒハウゼンといったキャラクターを通じて話のテンポを学び、読み聞かされた物語の再話やその続きを書いたりしてリズムやテンポを自分のものとしします。そしてこういったことは二度と体験することはありません。／ほんの一例ですが、ある時期の器に注ぐ内容は自ずとそれに見合ったものになる、ということではないかと思えます。器は絶えず変化していくので、内容もどんどん変わる---文化との出会いには“臨界期”があるとは言えないでしょうか。(中略)／私の小さな手遅れは、注ぎ込まれる内容に見合う器の用意がいつも少しずつ遅れてしまったことにあります。韻を踏む詩などはひとつも作れなかったし、冠詞の性や格変化などはどのようにして身につけるのか分からずじまい。ギムナジウム(5年生～13年生)では基礎のなさがひびいて、さまざまな文体やレトリックを学んでもさっぱり使いこなせない。そういった遅れを取り戻すには、やはりたくさんのことばに触れて、コツコツを基礎を固めていくよりないのだと思えます。／時間が足りなければ要所だけつまか、裾野を省くかにならざるを得ないわけです。早期にその言語環境に身を置くほど最終的習熟度が高いというのは、言語を習得するということは文化を受け継ぐこととほとんど同意義であることを反映してでのことでもあるという気がするのです。(後略)」

(／；段落、下線：筆者、内田,1999a,224-226頁より)

本分科会では会話におけるリズムの役割について論考を進めたい。

【問題】

1. 会話の交替のリズムの原初的なパターン；

会話がスムーズに進行しているときには、話し手と聞き手の発話の順番が交替している。この交替が会話にリズムをつくりだす。授乳時の乳児と母親との番の交替のリズムを共有することが非言語的なコミュニケーション(対人的やり取り)においても必要であるらしい。Kaye(1982)は、この会話のリズムは最初期の母子の授乳行動に「原初的対話」の基盤があるのではないかと推測している。

約4,700種もいる哺乳動物の中で人間の乳児だけが特異な吸い方をすることが知られている。乳児はリズムカルな吸い継ぎをしたあと、吸うのを休む。そうすると母親は「よしよし」と乳児をあやしたり揺すったりする。乳児は母親からのことばかけや働きかけを受けると、慌ててリズムカルな吸い継ぎに戻る。しばらく吸い継ぐとまた吸うのをやめる。すると母親は乳児の頬をつついたり、「もう、いっぱいなの？」などとことばをかける。この母親の働きかけのあと、乳児は再び吸い始めるのである。こうして、乳児と母親がまるで発話の番の交替のようにリズムカルに番を交替するが、交替のタイミングは最初からうまくいくわけではない。

出生直後は母子の番の交替がうまくいかず、乳児が吸うのを休止しているときに母親が働きかけをやめないため、かえって乳児の休止を長引かせてしまったりする。ところが、生後2週間も経つと、母子の番の交替のリズムはスムーズになる。母親は乳児の休止にちょっとだけ働きかけてすぐに働きかけをやめ、乳児も約3秒後にまた吸い継ぎ始めるのである。さらに、6週目になると、一度乳首を吸う時間は平均12秒で、2週目に比べて乳児が一度に乳首を吸う時間は半分近くに短縮される。母親の働きかけ時間も半減する(正高, 1993)。こうして短いサイクルで乳児と母親の交替を反復するようになり、両者の番の交替は精妙なタイミングがつくられていくという。この非言語的なコミュニケーションが会話の順番取りルールにどのようにつながっていくのかの機序については定かではないが、コミ

コミュニケーションにおけるリズムは、スムーズな意志伝達の鍵を握っていることは間違いあるまい。

2. 会話のリズムの逸脱－「沈黙」「割り込み」；

会話のリズムは「順番取りルール(turn taking system)」（Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974）によって作り出される。話し手は自分の順番で最後まで話すことになるが、現在の話し手が、次の話し手を選択した場合や、そのような選択がなされないときには、次の話し手の自己選択が行われれば、話し手の交替がなされることになる。このような順番取りのルールを共有し、互いに共通の目標に向かって協力し合うのがスムーズな会話の進行にとって不可欠らしい。バフチン（1988）は発話の特質として「境界性」と「完結性」の二点をあげる。境界性とは他者の発話が完結した後に自分の発話が続き、さらに他者の返答が自分の発話に後続する。このような話し手と聞き手の発話の「順行性」が会話のリズムをつくりだしているのである。

ところが、このような順番取りのルール、あるいは順行性は、ときに破られることがある。一人が話している途中で他人が割り込むことにより発話の順番を無理に奪ってしまったり、話し手が同意を求めたり、発話の番の交替を合図しても、一切応じず、沈黙を続けることで会話のスムーズな番の交替に協力しない場合である。こうしたルール違反は協力的な会話の進行を妨げることになる。聞き手のルール違反によって話し手は中断を余儀なく発話権が奪われてしまうことになる。

男女間で交わされる会話を観察すると、どうやらルール違反は男性の方が多らしい。男性は、「割り込み」や「沈黙」などの順番取りのルールに違反することによって会話権を取ろうとする傾向があるし、女性は、相づちが多くなって聞き役に回ることが多くなる（Zimmerman & West, 1975; West & Zimmerman, 1977; Fishman, 1978）というのである。

江原ら（江原・山崎・好井, 1984）も、以上の知見に注目し、日本人学生男女の会話を観察した。男性は女性とは異なる「質問－応答連鎖」の技能を駆使してより円滑に自己の発話権を誘導し、女性の発言に関心がなければ意識的に「沈黙」し、女性の発話中止の要請をするし、「割り込み」によって発話権を奪ってしまうことも多いという。男性は女性に対して多く割り込みをして、女性はそれに応じていつの間にか聞き手の役割を取らされてしまうということが追認されたと報告している。これを踏まえて、「形式的に男女が平等に話し合いに参加できたとしても、女性の意見が意志決定に反映されにくい構造になっている。しかも、そのことに気づくことすらない」（江原, 1986, 47頁より）と指摘している。つまり、意識レベルでは「男女間でつくりあげた差別のない平等な個人同士の会話」であると思っているのに、行動レベルでは男女性役割にそのような差異が生じてしまっている。その結果、会話が、いつのまにか無意識的な性差別を再生産する場となっているのではないかというのである。

3. 会話の順番取りルールの価値づけの文化差；

ここで問題になるのは、会話の順番取りルールや順行性は会話の機序における文化普遍の絶対的な原理とは言えないという点である。会話のリズムの取り方、番の交替のタイミングには日米に違いがある。

会話というものがアメリカ人にとっては情報伝達や意見の調整に力点が置かれることが多いのに対して、日本人のそれは相手とのよい人間関係を作り上げることに主眼があるため、話し手が聞き手に注意を払い、たえず、同意や相づちを求めることが多い（Clancy, 1982）。すなわち、自己主張完結型のアメリカ人は自分の発話の番では一気に自分の意見を述べようとする。話し手は自分の主張をすべて述べ終えるまでは、聞き手が不用意に相づちを打ったり、割り込まれて発話を中断されるのを嫌う。日本人は会話の中では聞き手が自分をどのように思っているかに注意を払い、同意や相づちを求めることが多い。日本人とアメリカ人をペアにして会話すると、アメリカ人の話し手は、自分が話している途中で日本人の聞き手が何度もうなずいたり相づちを打ったりするため不愉快になるが、日本人が話し手のときには、アメリカ人があまり相づちを打ってはくれないので、逆に不安になるという。箕浦（1991）は日本人とアメリカ人の対人行動の準拠点の違いについて次のように整理している。日本人は他者を準拠点として対人関係の基本は他者を包摂している。他者を理解しつつ関与していくことが思いやりである。ところがアメリカ人は自己が意志決定の主体となる。そこで日本人は聞き手に配慮しながら会話を進めるのに対して、アメリカ人はまず自己主張を完結させようとするので、自分が話している過程で聞き手のうなづきや相づちなどの介入を嫌うのであろう。

アメリカ人にとっては「割り込み」はルール違反だが、ハワイの原住民やブッシュマンのグイ族では能動的に会

話に参加していることの証として「共同的同時発話」とみなされ、むしろ奨励されている。共同的同時発話は限られた成員間の親密な人間関係のもとで、話題の共有度も高いため、聞き手を「聞く義務」に拘束することなく、共に話す権利を行使させることをよしとするのである（菅原, 1998）。

4. 社会的関係のマーカの一つとしての性差

通常の会話場面では、私たちは相手の風貌や服装などを手がかりにして年齢や社会的地位を推測し、それに合わせたことばづかいをしようと心がけていることが多い。性差も会話行動を制御するときの手がかりの一つではあるが、唯一のものではなく、年齢や社会的地位の上下の手がかりが使える場合には、こうした社会的関係の方が優勢になるのではなかろうか。

たとえば、日本人の場合は相手との社会的関係を考慮して敬語を使い分けている（井出他, 1986）。儒教の精神の残る韓国人留学生は母語の敬語体系が日本語のそれと類似していることもあり、他の言語圏の留学生に比べて敬語の習得が容易であり、初級者であっても巧みに使い分けている。人間関係に上下はないという教育を受けてきた中国からの留学生は、日本語に習熟するにつれて尊敬語や謙譲語は使わなくなるが、その代わりに丁寧語を使用して相手との心理的距離を取ろうとする（鈴木, 1989）。これは会話行動が対話者間の対人関係や社会的関係によって意識的に制御を受けていることを推測させるものである。

江原ら（1984）は日本人でもアメリカと同様の行動が追認されたと報告しているが、少数事例の観察から導いた結論であるため、仮説に適合的な行動を抽出してしまった可能性が考えられる。アメリカの知見が追認されるか否かは、会話に関わる諸要因をコントロールして、観察事例数を増やして組織的な観察を行う必要がある。対話者の社会的関係や会話の目標、会話に参加する人の関心の程度やトピックに関する既有知識の多少、相手を説得する会話技能の有無によっても会話行動が違ってくるものと想定されるからである。

これらのことを踏まえると、次の予測が導かれる。

第1に、会話の性による非対称は「社会的関係」を具現化した結果生ずるものである。社会的関係としては、まず、年齢や社会的地位が重要だが、これらが同程度か不明のときには、性差も社会的関係の上下を決める手がかりとして登場するようになるのかもしれない。

第2に、会話は無意識的というよりも社会的関係の認知に基づき意識的に制御され、その結果として会話表現に非対称が生じるのであろう。

第3に、会話行動は会話の場における参加者の目標やトピックへの関心や既有知識の程度、説得技能に応じて状況依存的に制御される。

以上の予測を確かめるために、第1に、初対面の若い男女の会話、第2に、社会的地位の異なる男女の会話を観察した（内田, 1993; 1999b）ので、以下に報告する。

【研究1】初対面男女における会話のリズムの逸脱

(1)被験者：被験者は初対面の大学生男女各20名、計40名を2名ずつ対にし、相手が異性か同性かで男同群（男性が同性と話す）、男異群、女同群、女異群の4群、計10組が構成された。各被験者は同性と話す場合と異性と話す場合の両方に参加した。なお、群間、各対間の認知能力の等質性を確保するため知能値と相関が高い芝式語彙検査（大学生版）得点によって統制した。

(2)話題と手続き：関心や既有知識の影響を見る目的で会話の話題として①軽い話題として「入学式」（「総長の心新入生知らず」と題して東大入学式に現れた奇抜な新入生を揶揄した写真誌『フォーカス』の記事）と②まじめな話題として「産み分け」（朝日新聞の社説で男女の生み分けについての問題提起をした記事）の2種を用意した。10組のうち半分は①、残り半分は②について会話し、同じ話題を繰り返さないようにカウンターバランスをとった。実験者は、被験者2人を実験室に誘導し、記事を渡す。自己紹介をした後、記事の文章を読み、2人の意見をまとめて一定の結論を出すように教示を与えてから実験者は立ち去り、被験者2人で一定の結論が出るまで会話してもらう。会話の過程はテープレコーダーによって録音した。

(3)意識調査：

1. 性役割意識調査：会話終了後、被験者の性役割意識を調べるため、(a)「性役割志向性尺度」(ISRO：社会から期待されている性役割をどのように理解しているかについての尺度(Dreyer, et al.;1981))、(b)「個人的属性質問紙」(PAQ：社会から期待されている性役割を自分はどの程度果たしているかという意識をとらえる尺度(Spence & Helmreich;1978)) の2つの尺度を実施した。

2. 会話意識調査：被験者の会話行動と会話での意識や内観の関係を明らかにするため、①普段は会話時にどういふ点に気をつけているか、②普段の会話時の役割として自己主張をするタイプか聞き役に回るタイプか、③今回の会話に参加したときの内観を調査する項目からなる「会話意識調査」を作成し、実施した。

(4)分析方法：テープ録音を時間順序に従って、ポーズ時間やイントネーション、強勢、相手との発話の重複など、できる限り忠実に書き起こし、トランスクリプション(表1)を作成した。会話開始約5分後から10分間分のトランスクリプションを分析対象とした。

表1 トランスクリプト例

時間	6'00"		
A:	気持ち悪いですよー、これ。	うん。	(*)
B:	ほんと気持ち悪い。	こういう人	

(*)	人とは絶対結婚したくないで絶対したくない? P (4")でもお見合いにいこ

表記上の貴号例 | : 番の交替がスムーズでポーズがない ↑ ↓ : 発言の重なり P(x"): ポーズ(秒数)

(5)分析枠組み：発話の分類のための基準を表2に示した。

1. 発話機能の分析枠組み；先行研究に倣い、①「問題解決機能」男性に多いとされている機能として「割り込み」「同時発話」「反論」「無視」「話題提供」「問題提起的質問」「同意を求める添音」「前置き」を設定した。②「会話進行的機能」女性に多いとされている機能として「あいづち」「反復」「沈黙の修復」「相手の発話の促し」「援助的質問」「援助」を設定した。各発話単位(1発話単位=1動作主+1関係)がこれらの枠組みのいずれのカテゴリーに入るかを2名で独立に判定し、10分間あたりの頻度を数えた。判定の不一致箇所は協議によって調整した。

2. 言語表現の特徴分析枠組み；敬語、丁寧語、断定を避ける文末表現、付加疑問、ぼかし表現、大げさな表現、強調、擬態語、感嘆詞、倒置、後置、添加、代名詞、終助詞について、表現の性差を分析した。

(6)分析方法：1.対のそれぞれの発話時間(話し手と発話持続時間)の測定、2.分析枠組みに基づく発話機能の分類し出現頻度を算出、3.意識調査はそれぞれの得点基準に基づき得点を算出した。

(7)出現頻度の補正基準：10分間あたりの発話時間について、被験者の性差の要因、並びに対話者が同性か異性かという要因の二要因の分散分析を行ったところ、性差×対話者の性差の交互作用が有意となり、対間比較を行った結果、男異群が女異群よりも有意に発話時間が長いことが明らかになった。これは、

表2 会話の分析カテゴリー

(1) 発話機能
①問題解決機能 (先行研究II；男>女)
・ 割り込み (会話の番をとる)
・ 同時発話
・ 反論 (絶対的反論・受容的反論)
・ 無視 (意図的沈黙)
・ 話題提供 (話題転換・話題発展)
・ 問題提起的質問 (自分の話題に相手の発話を誘い出す質問)
・ 同意を求める添音
・ 前置き

②会話進行的機能 (先行研究II；男<女)
・ あいづち
・ 反論 (同調・確認)
・ 沈黙の修復
・ 相手の発話の促し (援助的質問)
・ 援助的質問
・ 援助

(2) 言語表現の特徴 (先行研究Iとの比較)
・ 敬語
・ 丁寧語
・ 断定を避ける文末表現 (よね、〜けど…)
・ 付加疑問
・ ぼかし表現 (わりと、こう、まあ、とか、とゆう)
・ 大げさな表現 (すっごい、とつても)
・ 強調 (〜なんか、〜なんて)
・ 擬態語
・ 感嘆詞 (うっそー、ひゃあー)
・ 倒置・後置・添加
・ 代名詞 (1人称・2人称)
・ 終助詞

注) 先行研究I：井出, 1979；井出, 1982；大坊, 1982
 先行研究II：Zimmerman & West, 1975；West & Zimmerman, 1997；Fishman, 1978；江原・山崎・好井, 1984

男性対女性の対で会話するとき男性の方が女性より長時間発言することを示しており、大坊（1982）の知見と一致するものである。このような発話時間の長さの差は、特定の発話機能の出現頻度に影響を及ぼすと考えられる。

そこで、発話機能の出現頻度は各発話時間あたりの出現頻度に換算した。「沈黙の修復」は沈黙回数あたり出現頻度に換算した。「あいづち」は聞き手時に生ずるので相手の発話時間により補正した。

なお、発話機能のうち「沈黙」と言語表現の特徴については10分間あたりの出現頻度の実数を用いた。

◆結果と考察

(1)会話行動に見られる性差はどのようなものか：

出現頻度について性差（男・女）と対話者の性差（対同性・対異性）の繰り返しのある二要因の分散分析を行い、対間比較を行った結果、並びに、先行研究を追認したか否かについて表3に概括して示した。

表3 会話行動に見られる性差

1. 性差			
ぼかし「あの」	男>女*	→よりフォーマル	
ぼかし「まあ」	男>女**	〃	
倒置・添加	男>女**	→言い残しを避ける	[I=]
ぼかし「なんか」	男<女**	→よりカジュアル	[I=]

沈黙の修復	男>女**	→会話進行的機能	[II≠]
割り込み	男>女**	→問題解決的機能	[II=]
2. 対異性・対同性の差			
援助的質問	異>同*	→相手と心理的距離大	[II≠]
感嘆詞	異>同**	“うまく会話を運ぼう”	[I≠]
倒置・添加	異>同**	“会話をもりあげよう”	[I≠]
ぼかし「なんか」	異<同**	→「気やすさ」より大	[II≠]
沈黙（発話停滞）	異<同*	“相手に特別に気を使わなくてよい”	[II≠]
沈黙（話題なし）	異<同*	“黙っていても気詰まりな感じがしない”	[II≠]
3. 交互作用			
敬語・丁寧語	女異>女同**	→異性に対して女性性誇示	[I≠]
〃	男同>女同**	→男性同士の方が心理的距離大	
前置き	男異>女異*	→会話の主導権を取ろうとする	[I≠]
強調「なんか」	女同>男同*	→気楽に自己主張	

沈黙の修復	男異>女異*	→男女の結果と併せると男性の方が会話進行に気を配ってる	[II≠]

注) 有意水準* ; P<0.05、** ; P<0.01

分析結果 ≠…先行研究を追認しない、=…先行研究を追認する

先行研究I ; 井出, 1979 ; 井出, 1982 ; 大坊, 1982

先行研究II ; Zimmerman & West, 1975 ; West & Zimmerman, 1997 ; Fishman, 1978 ;

江原・山崎・好井, 1984

まず「問題解決的機能」について、「割り込み」では男女差が有意であり、男性の方が女性より割り込みを多く行っている。同様に男性が女性より多かったのは「前置き」である。これは会話を特定の文脈に持ち込み相手の注意を自分に引き付け、自分が発話の番をとるためのものである。「割り込み」の結果と併せると、男性が会話での主導権を取ろうとする傾向を示唆しており、先行研究の結果を追認するものであった。

「会話進行機能」の中の「沈黙の修復」の項目についても男性が女性より多く、男性が異性に対しての方が女性が異性に対するときよりも多いことが明らかになった。会話に関する意識調査において、男性の回答の中に「相手が退屈したり疲れたりしないよう気を付ける」という記述があり、男性の方が「沈黙」をなんとか修復したいと気を配っていることがうかがわれる。これは先行研究の知見に反する結果である。

「ぼかし」のうち“まあ”は男性が、“なんか”は女性が多く使用している。“まあ”は講演や会議などでまとまった談話を生産する場面で多く使用され、“なんか”はカジュアルな日常会話で使われることが多い。これを、会話意

識調査における内観として多くの被験者が指摘した、“異性に対しては緊張し、同性同士では「相手に特別気を遣わない」と併せて考えると、男性の方が女性よりも相手との心理的距離を保って会話を進めているということなのかもしれない。

「倒置・つけ加え」は男性が女性よりも多く使用し、異性同士の場面の方が多いということが明らかになった。この表現は言い残しを避ける場合と言語の流暢さの欠如の場合の両方が考えられるが、異性同士で増加するということから考えて、心理的距離の大きい者同士で自分の発言をより適切なものにするため欠けた情報を補っているという可能性が大きい。

「質問」や「感嘆詞」は異性に対しての方が同性同士においてより多く出現しており、「沈黙」は「発話停滞」「話題無し」のいずれも、同性同士で多い。会話意識調査では同性同士の場合は「黙っていても気まずくはない」という内観が多く出現したと併せると、同性同士の方が気楽に会話を進め、相手が異性だと何とか話を展開させたいという心理が働いていることがうかがえる。男性も女性も会話進行に気を配っていることを示唆しており、女性が会話進行に気を配るとした先行の知見とは反する結果であった。

「敬語・丁寧語」は女性が男性に対して、男性は男性に対して多く使用している。これらの表現は相手との心理的距離の表現である (Clancy, 1982)。また、会話意識調査においても、女性は相手が男性のときに心理的距離を感じており“自分が女性であることを意識している”との内観が得られ、一方、男性は“相手が女性だと下手に見られないように気をつける”という内観が得られている。よりカジュアルな表現である「強調“なんか”」が女性同士の場合に男性同士よりも多く出現するという結果と併せて考えると、女性は女性同士の方が気楽に話せるが、男性はむしろ初対面の男性に心理的距離を感じるようである。この推測の傍証となるのは一人称代名詞の使い分けの違いである。

一人称代名詞については女性は「わたし」か「あたし」であり、会話の相手が同性か異性かによって比率が変わることはない。これに対して男性は「おれ」「ぼく」を使用しているが、図1に示すように、会話の相手が同性か女性

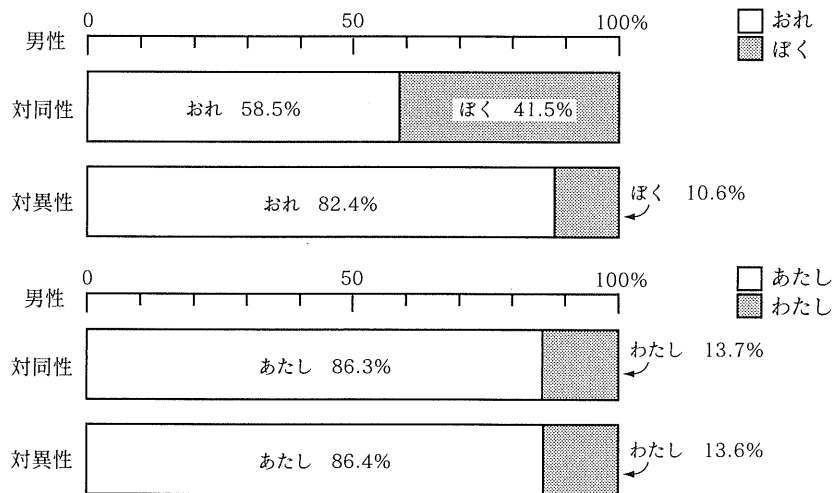


図1 一人称代名詞の相手の性別による使用比率

かで使い分けている。男性同士の方がフォーマルな「ぼく」を女性に対しては「おれ」を使う傾向が高い。これは女性に対して、男性性を誇示しようとするものの現れか、他の指標にも見られたように、同性である男性に対してより心理的距離を感じていることの表出なのかは定かではないが、女性が相手の性により一人称代名詞を使い分けないことと比較して興味深い。

以上の結果から、「割り込み」のみ先行研究の知見を追認する結果を得た。しかし、この項目以外の他の項目は性別により出現頻度がどちらか一方の性に偏るというわけではなく、男女とも会話進行に気を配り、心理的距離に応じた表現の使い分けをしていることが明らかになった。

また、会話行動と会話意識の関係を検討した結果、行動と意識とは必ずしも一致しておらず、会話行動と意識の間には微妙な関連性が見られた。例えば、“自分は会話進行的役割がとれない”と答えた人が会話行動の上では会話進行的機能の発話や行動の出現頻度が高いというように、行動上は意識していることとバランスをとるようにふるまっ

ていることがわかった。

(2) 会話行動と性役割意識との関係はどのようなものか：

本研究の被験者の性役割意識の特性をみると、第1に、理想の性役割像を測定した(a)「性役割志向性尺度 (ISRO)」の結果、都内大学生についての調査結果 (東, 1984) に比べて、本研究の男性被験者はフェミニスト傾向が高く、女性被験者は伝統志向が高いことがうかがわれた。第2に、性役割の自己評価を測定した(b)「個人的属性問紙 (PAQ)」では、男性は両性具有型・異性型が多く、女性度が高く、女性は伝統型が多く、女性度が高いという結果となった。

さらに、この性役割意識と会話行動の関連を検討したところ、興味深い関係が明らかになった。まず、会話機能を「問題解決機能」と「会話進行機能」に分け、各項目毎の頻度を合計して性役割意識とのクロス集計を行い、フィッシャーの直接確率を算出して2つの指標間の関連性を検討した。関連性が有意だったものと有意の傾向が認められたものについて表4に概括する。

(a)理想と(b)現実が一致している場合は、女性度が低い男性は会話進行的機能の出現頻度が高く、会話進行機能をとる傾向が示唆された。また女性度が高く男性度が低い女性は問題解決的機能の出現頻度が高く、会話進行に関わる会話行動をとる。しかし女性度も男性度も高い両性具有の女性は、会話進行機能をとっているという傾向が見いだされた。

(a)理想と(b)現実が不一致の場合は、女性度が高い男性は会話進行的機能を果たしている傾向が見られた。

以上から、社会の性役割期待に合致して、社会的適応の高い男性的な男性とアンドロジニー (両性具有) の女性は会話機能のうち会話進行的機能の頻度が高い。しかし、女性度の高い男性は会話進行的機能は少なく、伝統型の女性は問題解決的機能の頻度が高いのである。

以上のように、被験者を性役割意識によって会話機能との関連を詳細に検討することによって、性度との関連で会話行動が異なることが明らかにされ、男性が問題解決的機能の発話が多く、女性は会話進行的機能の発話が多いという先行の知見と対立する結果が得られた。

以上から、男女とも、「自信型」に属するか「自信欠如型」に属するかによって会話行動が異なる可能性が示唆されたのである。すなわち、理想像と自己評価が一致して社会的適応のよいと推測される「自信型」に属する被験者は男女を問わず、会話進行機能をとっているのである。これは、いつでも自己主張できるとか、相手を説得できるという自信があるからこそ、相手の発言を助け、じっくり言いたいことを聞いてあげる「聞き上手」になれるためかもしれない。ところが、理想像と自己評価が不一致の男性や、社会適応という点では葛藤のある「伝統型」の女性たちが属する一種の「自信欠如型」では、男性は会話進行機能を取れず、女性は問題解決機能の項目の出現頻度がかえって高くなるのである。

以上から、単なる性別が会話行動を規定しているのではないことがはっきりと示されたと言える。

さらに重要な知見として、ジンマーマンら (Zimmerman & West, 1975; West & Zimmerman, 1977; Fishman, 1978) の先行研究では、「問題解決機能」とは、会話の主導権をとり、会話のある方向に導く主役という意味合いが込められており、相手の発言を助け、会話の中ではどちらかと言えば受身にまわるという意味合いで使われた「会話進行機能」よりも優位にあるとされていたが、人の話をじっくり聞き人間関係の調整を行う文化 (Clancy, 1982)、自己の行動の準拠点を他者に置く日本 (箕浦, 1991) では、この優位性が逆転する可能性が示唆されたことである。

(3) 会話の生産性を左右するのはペアか話題か：

①話題に中心化した会話が展開しているか、②評価できるような一定の結論を出したか、③対話者の貢献度は対等かという3つの基準 (各10点満点、計30点) に基づき3人で独立に会話を評定して得点化した (表5)。これに

表4 会話行動と性役割意識との関係

(a) 理想像；ISRO「男性とは…」「女性とは…」
(b) 自己評価；PAQ「自分は女性的か、男性的か」
① (a)と(b)が一致している場合
男性：女性度が低い→ <u>会話進行的役割をとる</u>
女性：①女性度が高く男性度が低い
→ <u>問題解決的役割をとる</u>
②女性度が高く男性度も高い (両性具有)
→ <u>会話進行的役割をとらない</u>
② (a)と(b)がズレている場合
男性：女性度が高い→ <u>会話進行的役割をとらない</u>
⇒会話進行的役割は男性的な男性、男っぽいとおもっている女性によって取られている。
→「自信型」はいつでも自己主張ができる。
→聞き上手。

ついて材料×条件群の分散分析を行った結果、「生み分け」の方が「入学式」よりも得点が高く、話題の内容がまじめなものか週刊誌的なもので会話の生産性は左右されることが明らかになった。また「入学式」では男同群と女同群の間には差が見られず、異性の対よりは得点が高くなる。また「生み分け」では女同群が最も得点が高く、異性の対がこれに次ぎ、男同群が最も低いということになった。話題への感心度が得点に影響を与えることを示唆している。会話の生産性は話題の特質によって制約を受けると言えよう。

表5 会話の生産性のペア別得点の平均
(分散)

話題 ペア	「入学式」	「生みわけ」
男性対女性	17.3 (7.1)	18.6 (6.5)
男性同士	19.8 (9.0)	16.3 (6.7)
女性同士	19.8 (7.6)	22.5 (3.8)

【研究2】社会的地位の上下関係による会話行動の相違

研究1は、同年齢の初対面男女の会話について取り上げてきたが、さらに社会的地位や年齢が異なる男女の会話について取り上げるにより、性差を越えて、これらの要因が会話行動に影響を与えるかどうかを検討できるはずである。

そこで、相手がどのような社会的地位にいるかがわかるテレビの対談番組「徹子の部屋」を取り上げ、対談相手が男性・女性×年齢や社会的地位の上・下の4タイプ各6本計24本のビデオを、対談が佳境に入った10分間のトランスクリプションを研究1と同様の手続きで分析した。

結果を概括すると、目下の相手には問題解決的役割を果たし、「割り込み」も多くなる。「同時発話」や「発話停滞」、「割り込み」による発話の番を取ってしまうのは対談相手が目下の場合にのみ生じた。

対談相手が目上の場合、「敬語・丁寧語」が圧倒的に多く、また間接的（婉曲）表現が多く、相手の心理的距離を言語表現によって表そうとしていることがうかがえる。

以上の分析により、最初に予測したようにインタビュアーは対談相手の性よりも相手の社会的地位や年齢によって話し方を変えていることが明らかになった。

【総括的討論】

(1) 会話の非対称性を規定する要因は何か；

2つの観察研究の結果次のことが明らかにされた。会話行動を規定しているのは、自分と相手との心理的距離である。この心理的距離は、自分と相手との社会的関係の判断に基づいて決定されると言ってもよい。特に相手が初対面の場合には社会的関係の判断は、相手の年齢、服装、雰囲気、肩書などに基づいてなされるが、それらの差が明確な判断基準にならないときには、性差も基準の一つとしてクローズアップされることになるのである。これは第1の予測を支持している。

話し手は「平等に話している」という意識をもっているわけではなく、相手との社会的関係によって会話での表現を意識的に制御している。性役割観や自己意識、相手が自分をどうとらえるか、経験を通して獲得した自分の会話技能に関する意識、すなわち、自分はいつもどう振舞い、それが相手にどのような印象を与えてきたかといったメタ認知に照らし合わせて、たえず自己の会話行動をモニターしているのである。これは第2の予測を支持している。

さらに会話で取り上げる話題の性質は、会話に参加する人の既有知識や関心を活性化し、発話構成に影響を与えることが明らかになった。これは予測3を支持している。

(2) 会話のリズムの逸脱が起こるのはどういう場合か；

「割り込み」「停滞」などにより、会話の番の交替のルールが逸脱が生ずるのは次の2つの場合であると考えられる。

第1に、ジンマーマンら（Zimmerman & West, 1975; West & Zimmerman, 1977; Fishman, 1978; 江原・山崎・好井, 1984）が指摘しているように、会話権を発動する場合であり、これは男性だけがこの権利を発動するわけではなく、男女にかかわらず、会話で取り上げられている話題が自分にとって重要であるかどうかにより会話権を発動しようとするのである。また会話に熟達していない相手や目下に対しても発動し易い状況が生じることがある。し

かし、一般には男性が社会的競争場面におかれる経験の頻度が高いということから、「割り込み」や「停滞」を一種の「技能」として、無意図的ではなく、「意図的に」使うことによって、会話を有利に運ぼうとすることが多いとも考えられる。このことが、ジンマーマンらの指摘につながったのかも知れない。

第2に、会話行動は社会的行動全般の洗練度や社会化の程度を反映していると考えられ、若い男性における社会的態度の一種の粗野さが会話行動に現れたものと考えられることができる。実際、男子学生の敬語の使い分けは不完全であり、その使い分けのパフォーマンスは日本語歴3年程の留学生と変わらない(鈴木, 1989)。また、本研究で実施した会話意識調査においても、“相手からどのように見られるかということについて特別な気配りをして言語表現を変えようとする”という内観も女性に比べて圧倒的に少ない。これらのことは第2の可能性の推測を裏付けるものである。

(3)会話におけるリズムの役割；

以上に述べてきたように、会話者の対人関係の準拠点や、本人がコミュニケーションにおける自己意識、会話技能への習熟度、話題の文脈の共有度や関心によって、会話のリズムの逸脱が起こるかどうかが左右される。性役割意識もリズムの逸脱を引き起こす一要因ではあるがそれがすべてではない。

「気が合う」とは呼吸のリズム、コミュニケーションのリズムの共有された状態を指している。佐藤¹⁾は「リズムは民族にとって心地よく、記憶するのに最もふさわしいもの」と指摘し、徳丸(2002)は「リズムは文化的な拘束を受けるもの」と述べている。筆者は、発達の観点からコミュニケーション・ルーチンを形成するときの不可欠な道具になると考えている。リズムは各民族、文化、母子に特有のものである。

乳児期からみられる他者との社会的やり取りのリズムは、生後6週間も経つと、番の交替が非常にスムーズに行われるようになり、それぞれの母子に特有の、非言語的なコミュニケーション・ルーチンが形成される。乳児期から母親とやり取りを通して、各母子に特有のコミュニケーション・ルーチンをつくりあげるようになる生後7カ月頃には、もはや他人とはやり取りできないくらいに、母子特有のリズムで相互交渉している。この段階では乳児は他の人々から「孤立」することになる。他人が乳児に働きかけると、「人見知り」が起こり、母親から引き離されると、意志疎通のできる相手、リズムを共有する相手を失うために「分離不安」が起こる。しかし、子どもがことばを獲得するようになるとコミュニケーションはより公共的なものとなり、他人とも相互交渉が可能になる。ことばを獲得するに伴って、人見知りや分離不安は消失していくのである(内田, 1999b)。

人は相手の呼吸のリズム、やり取りのリズム、会話のリズムに準拠して自分のリズムを調整しようとする。こうして、状況依存的にリズムを共有することにより、スムーズなコミュニケーションを成立させているのである。

注) 佐藤保 2002 中国詩歌におけるリズム. 第4回国際日本学シンポジウム「<国際>日本学との邂逅」でのご提案より。

【文献】

- バフチン, M. M. 新谷計三郎・伊東一郎・佐々木寛(訳) 1988 ことば対話 テキスト. 新時代社.
- Clancy, P. M. 1982 Written and spoken style in Japanese narratives. In D. Tannen(Ed.), Exploring orality and literacy. ABLIX Publishing Corporation.
- 大坊郁夫 1982 男性と女性のコミュニケーションパターンの比較. 日本心理学会第四六回大会発表論文集, p.431.
- Dreyer, N. A., Wood, N.F., & James, S. A. 1984 ISRO: A scale to measure sex-role orientation. Journal of Sex Roles, 7(2), 173-182.
- 江原由美子 1986 現象学的社会学あるいはエスノメソドロジーにおける性差別研究の方向性. 女性文化資料館報, 7, 41-48.
- 江原由美子・山崎敬一・好井裕明 1984 性差別のエスノメソドロジー—対面的コミュニケーション状況における権力装置—. 現代社会学, 18, 143-176.

- Fishman, P. M. 1978 Interaction: The work women do. Social Problems, 25, 397-406.
- 井出祥子 1979 大学生の話しことばにみられる男女差異. 昭和54年度科学研究費-特定研究「言語」報告書.
- 井出祥子 1982 言語と性差. 言語 11(10), 40-48.
- 井出祥子・荻野網男・川崎晶子・生田少子・共同研究者: エレノア・ジョーデン, ビバリー・ヒル, エリザベス・ヘンジベルド 1986 日本人とアメリカ人の敬語行動-大学生の場合-. 南雲堂.
- Kaye, K. 1982 The mental and social life of babies. Chicago:University of Chicago Press.
- Lakoff, R. 1975 Language and woman's place. Harper & Row Publishers.
- かつえ・あきば・れいのるず、川瀬裕子 (訳) 1985 言語と性-英語における女性の地位. 有信堂.
- 正高信男 1993 0歳児がことばを獲得するとき: 行動学からのアプローチ. 中公新書.
- 箕浦康子 1991 子供の異文化体験. 思索社.
- Sacks, H. Scegloff, E. A., & Jefferson, G. 1974 A simplest systematics for organization of turn-taking for conversation. Language, 50, 696-735.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1978 Masculinity and femininity: Their psychological demensions, for-relates and antecedents. University of Texas Press.
- 菅原和孝 1988 会話の人類学: ブッシュマンの生活世界(2). 京都大学学術出版会.
- 鈴木教子 1989 留学生と日本人の敬語行動. 昭和64年度お茶の水女子大学修士論文.
- 徳丸吉彦 2002 リズムを周期性から開放する. 第4回国際日本学シンポジウム「<国際>日本学との邂逅」, 35-39.
- 内田伸子 1993 会話行動に見られる性差. 日本語学, 12, 156-168.
- 内田伸子 1999a 第二言語学習における成熟的制約-子どもの英語習得の過程-. 桐谷滋 (編) ことばの獲得. ミネルヴァ書房, 195-228.
- 内田伸子 1999b 発達心理学-ことばの獲得と教育-. 岩波書店.
- West, C., & Zimmerman, D. H. 1977 Women's place in everyday talk: Reflections on parent-child interaction. Social Problems, 24, 521-529.
- Zimmerman, D. H., & West, C. 1975 Sex roles, interruption and silence in conversation. In B. Thorne, & N. Henley(Eds.), Language and sex: Difference and dominance. Newbury House.